

特別展「維新十傑」関連企画
「坂本龍馬と刀剣」

令和元年11月16日（土）

司会：それでは、時間になりましたので、講演会のほうを始めさせていただきたいと思います。今回は、特別展「維新十傑」の展示の関連企画としまして「坂本龍馬と刀剣」と題しまして、小美濃清明先生をお招きいたしました。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

まず、私のほうから少し小美濃先生についてご紹介をさせていただければと思います。小美濃先生と龍馬記念館はもうかなり古いおつき合いになりまして、今回こうしてお招きできたことをほんとうにうれしく思っております。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、小美濃先生がご寄贈いただいた陸奥守吉行という刀を当館ではずっと展示してきております。

それから、私がいろいろ刀剣の勉強をするときや、質問に答えるときなんかにも必須の本であります、この『坂本龍馬と刀剣』という研究書を書かれております。常に私は手元にこれを1冊置いております。それから、近年では非常に重い大きな本ですが、『坂本龍馬大鑑』という本を執筆されております。こういった龍馬の研究や刀剣の研究を長らくされていた方になりまして、今回は展示の中で龍馬が持っていたと伝わる刀剣で、現存している5振全てを展示しておりますので、これに関連したお話をさせていただきたいと思ってお招きいたしました。

それでは、先生、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

小美濃：ただいまご紹介にあずかりました小美濃でございます。きょうは1時間半という時間をいただいておりますので、なるだけ詳しくお話ししたいと思います。それで、お手元にレジュメ、資料が一応番号を右下に振ってありますけれども、1から7までありますので、この資料に基づいてお話を進めていきたいと思っております。

まずですね、日本刀というもの、今、刀剣女子ということで女性に人気があるようでございまして、あちこちで話題になっておりますけれども、日本刀というものがですね、でき上がるのが大体、平安中期ぐらい、それ以前は聖徳太子が剣をつっておりますけど、あれは真っすぐでございまして、日本でつくったものでない、中国でつくったものでございまして、そういう鉄の技術、刀剣をつくる技術というのが帰化人によって伝えられて、それで日本刀というものが大体でき上がるのが平安の中期と言われております。そこから千数百年という時間がたっているわけでございますが、今、『日本刀名鑑』という本がございまして、それの中には約2万3,000人の刀工、刀鍛冶の名前が収録されております。その数だけでも2万3,000という、名前を残した人でそれだけでございまして、それに携わっていた人という、それこそ10万人を超えるような刀関係の職人さんたちがいたんじゃないかと思いま

す。そういったものを編集、整理して刀剣というものを学んでいくのが江戸時代中期ぐらいからと思います。

それですね、一番基本的なことで、レジュメの1ページ目の左側のところに、古刀、新刀、新々刀、現代刀というふうに古い順に載せてあります。古刀というのが関ヶ原の合戦以前を全て古刀といいます。そして、関ヶ原の合戦以後の方を新刀といいます。こういう分け方をしたんですね、古い刀、新しい刀と。そういうものができ上がるのが江戸中期ぐらいでございますので、その当時のものよりも後である龍馬の時代なんかは幕末でございますので新々刀という。それで、その新々刀の時代が終わって、明治政府ができて、明治、大正、昭和と来る。この頃にでき上がったものを現代刀という、一応古い順に4つに分けます。今でも生産されておりますので、令和の刀というのもでき上がっております。現代の刀鍛冶ですと300人ぐらいが、文化庁の許可をもらって日本刀をつくる仕事をされております。

そして、今、皇室の行事がいろいろとあって、そのたびに三種の神器のうちの剣璽というんですかね、草薙剣と勾玉がいつも天皇の横にあると。車にも乗せる台がついているみたいで、天皇の車のところに、ちょっと窓の下のところにはちらっときれが見えますけれども、あれが草薙剣の入った箱でございます、そういうものが今でも使われるということです。それで、宮様方も守り刀というものを持っておりますので、例えば雅子様がおこし入れになったときには現代鍛冶が守り刀をつくりました。そういう形ですから、宮内庁の中にはたくさんあるんですね。かなりの数があって、私の刀の師が吉川賢太郎といって、宮内庁御物御剣掛という刀担当でございます、一月に1回宮内庁へ入って宮内庁の刀の手入れをするという仕事をしておりました。それで、昭和天皇が亡くなったときに、棺の中に一振、剣を入れます。それをたくさんある中からどれを入れるかというのを私の先生が選んで、これを入れようということで入れております、一振。そういう仕事は今でも続いています。

そのほかに、刀剣というのは武器でございますけれども、美術品としても評価をされているということで、世界中で刀剣を愛する方々がたくさんいっしょにしまして、それで刀剣協会というのがある。日本美術刀剣保存協会というのがございます。それで、外務省でも国賓の方が来られる、こちらから行くという場合にお土産をやはり持っていくんですね。そのときに日本刀が欲しいという向こうからの依頼があると新しい刀を打って、それを持って行って、王様とか、特に中近東の中東の国々は剣なんかが好きなので、そういうところへ日本刀を今でも持って行くということになって、今でも日本刀は生産されているということです。

それで、坂本龍馬という幕末に活躍した人物、これに関してはたくさん研究する方がいらっしゃって、いろんな研究があります。それで、私の龍馬研究のほうの師が宮地佐一郎といって、講談社学術文庫に『龍馬の手紙』という厚い文庫本を出していますし、『坂本龍馬全集』というのを、これぐらい厚い本を出しております。その先生がこれもまた偶然で、私の自宅と近いところに住んでらっしゃったので、二十数年にわたってご指導いただいて、初めて土佐へ来るときも、宮地佐一郎先生も土佐の出身でございますので、ここへ連れてきても

らったという関係がございました。それで、坂本龍馬の研究を刀のほうからやってみようというふうにお話しました。そうしたら、そういう視点から研究している人は誰もいないから、あなたがやりなさいということで『坂本龍馬と刀剣』という本を最初に出しました。

私の父親が刀を研ぐという仕事をしております、部屋の中には侍の写真がいっぱい貼ってあったんですね。カタログとか本。そこに龍馬の写真も貼ってありまして、龍馬の写真を見ていますと、龍馬が腰に短刀を差しております。その短刀を差した写真を私が子供のころ、それこそ小学校へ上がる前から見ていまして、誰だかわかんないけれども立っている人がいると、腰に短刀を差していると。その写真を常に見ていたというのがまず龍馬との接点でございまして、誰だか名前も知りませんが、ただ侍が立っている写真というので見ていた。それで、やはり父親が刀を研ぐということで、周りに刀がたくさんあるもんですから、そういう目で龍馬の写真を見ていたら、腰に短刀を差していると。しばらくしたらば、変な差し方をしているなと子供心に思ったんですね。それは何かというと、龍馬ははかまを結ぶひもに差しているんですね。ほんとうは帯に差さなければいけないと。着物を着る人はわかると思うんですが、着物を着て角帯を締めて、その上からはかまをつけます。ですから、刀は帯に差しますので、大体、柄の^{つか}ところしか見えないんですね、下が見えない。ところが、龍馬の写真をよく見ると、袴のひもに差していますから全体が見えるようになっていました。すると、その写真を見ると短刀の差し方が間違っているということで、私は子供心にこの侍は短刀を間違えて差していると、じーっと思っていたんですね。そのうちにだんだんと中学、高校、大学と行くうちにずっと見ていると、やはりこれはわざと差しているんだと。知らないわけがないですから、龍馬は侍ですから。わざわざ写真に撮るときに全体が写るように差し直して、袴のひもにつけているんだということがわかったので、それじゃあ、どうしてそういう写真を撮ったのかということがちょっとクエスチョンマークだったんですね。そこから、『坂本龍馬と刀剣』という本を書きました。それがそもそもの龍馬研究のスタートでございまして、つらつら考えると子供のころから坂本龍馬研究をしていたということになるわけでございます。きょうはその話なんかもしながら、ちょっと進めていきたいと思えます。

それで、レジュメに載せてきたのが、その1ページ目にあります『本朝鍛冶考』という、こういう本でございまして、これは12冊ぞろいでございます。一番下に「子」と書いてあって、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥という順に並んでおります。この『本朝鍛冶考』は、寛政7年7月に鎌田三郎太夫という人が書いた本でございまして、日本に長く日本刀というのが造られているから、どういう刀鍛冶がいたのかというのを彼が調べてこれだけの本にしたわけですね。龍馬も読んでいると思います。これはベストセラーになりましたからね。これ、最後の「亥」の巻ですね、イノシシ、ちょうど今年ですね、寛政7年、鎌田三郎太夫が出した、と記載されている。それで、ここに持ってきた本は、寛政12年に再版されたものですね、8月に出ています。京都書林というところから出て、江戸日本橋、大坂中橋筋ですか、河原町、それから寺町なんていうところからも出ているという

ことで、相当ベストセラーになったものでございます。刀についての知識というのは、やっぱり侍の教養の1つなんですね。ですから、いつの時代にどういう刀鍛冶がいたかというようなことが、この12冊の中に書いてあります。こういうのを熱心に読んで記憶していくという。刀の勉強というのは、100本見た人と1,000本見た人と1万本刀を見た人では実力が全然違って来る。やはり1万本見た人が目ききということになる。何本ぐらい見るのかというと、かなりの数になります。刀剣の勉強をするときということ、見るときは1日に何百本と見ますので、目がちかちかしてくるぐらいに実物を見てまいります。それで、この12冊の中の目立ったところを、『本朝鍛冶考』以外、5ページですか、刃文とか、それから刀鍛冶の名前とか、それから中心（なかご）の形、刃文、それから目くぎ穴、やすり目なんていうものをわかりやすくここに載せてあります。

それで、1ページ目の左の下のところの『本朝鍛冶考』の横に正宗というのはこういう刃文をしている、貞宗はこうであると、広光、助真はこうだというふうに絵で描いてあります。この刃文というんですかね、これが鉄をたたいて熱して伸ばすという、それを繰り返していくわけですね。ですから、倍々になっていくと、たたいていくと伸びていく、それを折り曲げてまたたたくと。2が4になって8になって16になってという。その横の面にいくと、層がずっとこう見えてくるわけで、それをたたいて横に伸ばしたり、縦に伸ばしたりして、練っていくわけですね、刀鍛冶が。それによって、刀の鉄の模様が出てくるんですね。それを肌というんですけれども、^{まきめ}杵目といってきれいに横に沿う、真っ直ぐに並ぶもの、それからこういう材木でできてきているものなんか、板目とか木目とかというような感じに鉄になる。そこへ焼きを入れるということになりまして、正宗というのはこういう焼きを入れて、こういう刃文が出るんだということが、この1ページ目に出ております。

そして、1ページ目の右側のほうに、友成、正恒、則宗、信房というのがこういう刃文であるというようなことが書かれております。友成というのは真っ直ぐで乱れていないんですね。こういうのを直刃^{すくは}というんですけれども、乱れでも丁子の刃の形をしているとか波型であるとかいろいろな名称がついておりますから、刀鍛冶によって自分がそれを美しいと思うような形を焼き込んでいくということになります。

そして、その横に「三条もの」と書いてあります。三条小鍛冶宗近という大変有名な刀鍛冶がいました。歌舞伎にもなっていますけれども、小鍛冶宗近、そこに斜めに筋が入っている、銘を切る前にここを平にするんですよ、そのためにやすりをかけるんです。そのやすりの角度というのがありまして、宗近の場合もそこに出ていて、こういうような形でやすりをかけてありますね。ここからここをつかの中に込めるというので、「中込」で「なかご」というんですけれども、それを龍馬は次の手紙の中で「中心」と書いて、これで「なかご」としてあります。それから、こういう字、草冠の「^{くき}茎」という字ですね、これでも「なかご」と読みます。いろいろ漢字がありますけど、中に込めるからなかご、「中心」で「なかご」でございます。

これが刀鍛冶によってみんな違うんですね。それを全部暗記していくわけですね。それで、

右側の上のほうに包清という、「包む」という字を「かね」と読みますけれども、包清という人の中心のやすりが書いてありますけれども、ここがしのぎという、かねへんに高いというので「鎬(しのぎ)」、よく時代劇で侍と侍が刀を合わせたとき、競り合いなるときに「しのぎを削る」という。かねへんに高い、それで「鎬(しのぎ)」と読みます。ですから、接近戦でこうやると、相当しのぎとしのぎがぶつかるわけですね。そこが削れるから「しのぎを削る」という、現代語でも「しのぎを削る」という言葉あると思うんですけども、競り合うことですよね。それから、包清はこういう違いにこういうやすりをかけるという癖があるということですね。ですから、中心を見た場合にやすりがどういう角度に入っているかというのを見るということが1つのポイントでございまして、包吉、「包む吉」と書いてあるのが、左側が水平にやすりが当ててあって、右側のほうが斜めに入っている。こういうやすりのかけ方をするわけですね。それを2万3,000人全部覚えるわけですね、暗記していくと。

ですから、記憶力の問題でございまして、1つ、覚え方があるんですけども、龍馬の時代はこういうものを見て、この人はやすりをこうかけるんだなというのを覚えていくわけです。それから、包吉、包清と、こう彫ってある。この鑿(たがね)というもので彫るんですけども、いわゆる筆跡鑑定をして本物が偽物かを見きわめるという1つのポイントでございまして。紙に筆で書いたものはくしゃくしゃになったり、消えてなくなっちゃいますけれども、刀の場合、鉄でございましてから鑿で彫り込むとそれがずっと残るわけですね。ですから、鎌倉時代だとか南北朝時代の刀というのは、そこに文書と同じように文字が刻んであるわけですから、ずっと残る資料ということになるわけでございます。

そして、刀鍛冶の流派というのがあるんですけども、大体、一文字は同じものを使うんですね。刀鍛冶の名前が右側の上に出ています、雲という字を彫って雲が重なると書いて雲重という、それから雲同、雲次、雲生、雲上、雲頭と、こういうふうに雲、雲、雲で雲類というんですけども、1つのグループをつくるわけでございます。そういうふうにして、この流派はこの漢字を使うというのだと暗記していくということ。ですから、刃文を暗記する、やすりの形を暗記する、それから漢字の一文字が誰の弟子かということ推定していくと。そういう勉強の仕方がございます。この中には系図も入っておりまして、誰の弟子がどうだとか名前が書いてあって、筋で系図のような形になっておりまして、ああ、この人の弟子なんだなというのがこれでわかるというふうになっております。

2 ページ目をおあげください。龍馬の手紙、直筆のものは百四十何通ありますけれども、その中に何通かは刀について書いたものがあると。特に有名なのは、この館にも実物がございまして、慶応3年11月13日に陸奥宗光に宛てた手紙、「さしあげんと申た脇ざしハ、まだ大坂の使がかへり申さざる故、わかり申さず。御もたせの短刀はさしあげんと申た私のよりは、よ程よろしく候。但し中心」、中心と書いてなかごと読ませますね、「中心の銘及形。是ハマさしくたしかなるものなり。然るに大坂より刀とぎかへり候時ハ、見せ申候。小弟の長脇ざし御らん成され度とのこと、ごらんニ入レ候。十三日」これが慶応3年11月

13日ですから、暗殺される2日前に陸奥宗光に宛てた龍馬の手紙でございます。自然堂という、「じねんどう」と読むのが正しいのでしょうかね。龍馬の最後の手紙ということで、これの本物がこの館に飾ってありますので、ぜひごらんください。

それとあと、その下に宛先、年月日未詳、括弧して推定、慶応2年5月下旬、お龍宛てとして、龍馬が絵を描いて『刀剣図考』という本があると、「右の本を御こし遣わさるべく候。太刀の匂がかいてあるナリ。やどにてかりてあるたんすのひきだしの下タのはしのひきだしに、白ラさやのたんとふがある。御こし遣わさるべく候。才谷梅太郎」というふうに書いてあります。これが『刀剣図考』でございます、実物です。龍馬が長さ6寸ばかり、3寸ばかりと書いてあります。1寸は3センチですから、掛ければ六三、十八でこれはちょうど18センチあります。3寸、三三が九で9センチと、これもぴったり合っています。龍馬は正確に寸法を書いていまして、刀の絵がずっと、こう描いてあります。ちょうど今でいうような文庫本みたいな横本というんですけど、懐に入れていたんですね、それで暇なときにこういうのを見ていたという本でございます。

これを私は龍馬と刀剣という本の中で、「やどにてかりてあるたんすのひきだしの下タのはしのひきだし」と、龍馬は宿屋に住んでいるんですね。だから、長期滞在していると。宿からたんすを借りるぐらい長期間であると。着物を入れたりするということでたんすを借りている。その下の端の引き出しに白さやの短刀が入っていると、それを持ってきてくださいと、この本と一緒に、太刀の絵が描いてあると。太刀の絵が描いてあります、こういうふうに絵が描いてある、それを持ってきてくださいと言っていると。そうすると、宿で借りてあるたんす、だから長く宿に泊まっているとすると、私はこれ、鹿児島に行ったときじゃないかなと。宿にいるお龍に宛てて、借りているたんすの引き出しに白さやの短刀があるから、その白さやの短刀とこの本を持ってきてくれと。それで、使いの者にそれを持たせてくれというふうに書いています。「謹付貴价申候(つつしんできかいにふしもうしそうろう)」と。要するに、使いを出したからその人に渡してくれというふうには龍馬が書いています。ここに描いてある絵ですね、これ、外装というんですかね、こしらえというんですけれども、外側がこういうふうには描いてあるから、それと白さやの短刀と。白さやというのはこういう外装に入っていない、白木のさやですから、白木のさやにきれいなこしらえをつくらうということで、これがモデルなわけですね。これと同じようにつくってくださいと誰かに頼むということだろうと。それで、でき上がった短刀がああ写真に差してある短刀だろうというふうには推定しました。それで、推定が慶応2年5月下旬ということで、龍馬の日記の中に研ぎ代が何両何匁というふうには細かく書いてあります。そのお金がなかったので借りて払っています。それがちょうど鹿児島から長崎へ行く前の日に、刀の職人さんに3両幾らか何かを払っていますから、それを日記に書いてありますので、龍馬が鹿児島滞在中に白さやの短刀を持って行って、外側の外装をきれいにつくり直してもらったんだということがわかる手紙だというふうには私は思っております。

それから、慶応3年6月24日、坂本権平宛てという手紙がございまして、途中から読み

ます。「然ニ先頃西郷より御送被遣候吉行の刀、此頃出京ニも常帯仕候。京地の刀剣家ニも見セ候所、皆栗田口忠綱位の目利仕候。此頃毛利荒次郎出京ニて此刀を見てしきりにほしがり、私しも兄の賜なりとてホコリ候事ニて御座候。」と書いています。要するに、西郷が弟のためにこれを持っていってくれとあって、西郷がこっちへ来たときに預かるわけですよ、権平さんから。そして、それを持って鹿児島に帰ると。そこへ中岡慎太郎がちょっと四侯会議の打ち合わせはどうなったかというのを聞きに来るわけですね。そのときにこうだという話をして、そういえば権平さんから龍馬への刀を預かっているから持っていってくれということで、中岡慎太郎がそれを預かって龍馬に渡すという段取りになるわけです。そのときに、龍馬はこの吉行の刀を差して京都に出ていって、「京地の刀剣家ニも見セ候所」と書いておりますから、京都に刀の鑑定家とか研ぎ師とか目ききの人がいるわけでしょう。それで、「皆」と書いていますから 1 人じゃないんですね。この人たちがこの吉行を見ると、この刃文の形からいって栗田口忠綱ぐらいの刀ですねと言った。

この栗田口忠綱というのは、刀剣のランキングでいうと大関クラスの刀です。吉行ですと前頭何枚目というぐらいもつと下なんですね。ですから、前頭何枚目の刀を持っていって大関の刀の「栗田口忠綱みたいがいい刀ですね」と言われたから、龍馬はうれしくてしようがないんですよ、ほら見ろということで。1 人に見せて「栗田口忠綱」と言ったので、また違う鑑定家のところへ持っていって、これをどうと思うと言ったら、「栗田口忠綱みたいですね」つって、ほらほらというので、龍馬は喜んで京都の中を歩いているわけですよ、刀を見せて。お兄ちゃんからもらった刀はこんないい刀なんだと。毛利荒次郎が出てきて、「どうだ、これ」ついたら、「うわー、欲しいな」と、「俺にくれ」と言うから、「私はこれは、兄から賜ったものなんだから、おまえなんかにあげられるもんじゃない」と言って、「ホコリ候事ニて御座候」と。すごい喜んでいっているのがわかってくるんですよ。龍馬はこういう本も読んでいますから、栗田口忠綱というのがどのぐらいすごいかというのがわかっているわけです。それと見間違えするぐらい、いい刀じゃないかと褒められたというので、うれしくてうれしくてしようがないという。慶応 3 年 6 月ですから、危ないですよ、京都は。その中であちこちの刀の専門家のところへ刀を見せ歩いているという、その辺が龍馬らしいといえば龍馬らしいんですけどもね。お兄ちゃんからもらった刀が褒められると、うれしくてうれしくてほんとうにしようがないというので、愛刀家龍馬の横顔が非常によく見えてくる手紙じゃないかということなんですよ。

それから、慶応 3 年 8 月 8 日、坂本権平宛てということなんですよ。これも途中から読みますけれども、「御所持の無銘、了戒、二尺三寸斗の御刀、何卒拝領相願度、其かわり何ぞ御求め成され度、西洋ものこれ有候得ハ、御申聞願ひ奉り候。先ハ今持合候時計一面さし出し申候。」と書いてある。また無銘の了戒、無銘だけれども了戒と鑑定されている 2 尺 3 寸ばかりの刀をお兄さんが持っているでしょう。それをまた拝領したいんですよ。そのかわりお兄さんが欲しいという西洋ものがあれば言ってくださいと。それをかわりに差し上げますからと。今は持ち合わせがないから、今持っている「時計一面さし出し申候」と。懐

中時計ですね、こういうものを持っている。これを一面と書いてありますから、これととりかえてくださいと。これを手付としてこれを渡しますというようなことも書いておりますね。これによって龍馬が無銘の了戒という刀、これは大和物でしてね、なかなか渋い刀なんですよ、感じが、古刀ですね。

昔は合戦のやり方が馬上戦なんかですから、非常に長いんですね。それが火縄銃が出てくると、馬上戦がなくなって接近戦になってくるので、日本刀が短くなります。そのために了戒と書いてあるものを切って、もっと短くすると。ですから、関ヶ原の合戦、信長、秀吉の時代になると刀が短くなってくるんですね。それで無銘になった了戒があったんでしょう。要はそれを欲しいと思ったので拝領したいということ、また権平兄さんに頼んでいるということでございます。無銘の了戒と書いてあることで、これによっても龍馬が無銘ですり上げているものも、いいものはいいんだということがわかって、これで龍馬の知識というのが非常によくわかるんですね。

私は特に慶応3年11月13日の陸奥宗光宛てのこの手紙を読んだとき、全部日本刀のことですね、私があなたにあげると言った刀をあげる前に研ぎ直さなきゃならないから、大坂に研ぎに出してあるから、それを大坂へでき上がったかでき上がっていないかを使いの者に問い合わせるんでしょうね。だから、まだ使いが帰ってこないからどうなっているかわかりませんと。あなたが私に鑑定してくれと言って持ってこさせたものは、私があなたにあげるよと言っているより、よっぽどあなたが送ってきたもののほうがいいよと。それはどこがいいかという、ただしとして、その説明で中心の銘及び形がちゃんとしていると。まさしく確かだ、本物であると。「まさしくたしかなるものなり」と。だから、大坂から刀がきれいに研ぎ上がって帰ってきたときは、あなたにそれを見せますよと。あなたが今の短刀のほうがいいわけだから、「ああ、こんなもんか、要らない」と言えば、そのままでいいから、何しろ、そのときにあなたが判断してくださいと。刀が研ぎ帰ってきたときにあなたに見せますよと言っているんですね。それで、私の長脇差、これは吉行のことだと思うんですね、を見たいと言っているから見せてあげますよということございまして、この短い文章ですけど、これを僕が最初に読んだときに、あ、プロだと思ったんですね。この判断の仕方はまさしくプロが判断する、ぱっとわかるわけですね、全てがいいか悪いか、刀の上位かそれよりも低い。やっぱり御もたせの短刀は私のよりよほどいいですよ。そのいい理由というのもしっかりと書いてある。それで、あげる前にちゃんと大坂の研ぎ師のところへ出してきれいに研ぎ上がったものを陸奥宗光にあげようとしているんだなということもわかりますし、ほんとうにね、刀のプロ、好き者しやというんですけどね。ああ、好き者なんだなと思いました。それで、こういう文章を書くからには、相当、龍馬というのは刀について勉強しているんだろうということがわかりました。何でこんなに刀について詳しいんだろうと思って調べ始めたんです。

その理由は3枚目をおあげください。細かい字で読みにくいと思うので、一応ですね、『上町分町家名附牒』という本で、これは安芸の歴民館にあります、現物が。これは誰でも

見られます。それで、本町通りの1丁目から5丁目が出てるわけですね。丸く同一丁、同二丁と書いてあって、坂本家は本町通りの1丁目ですね、この久村屋と相良屋の間に坂本家がございます。ここに龍馬がいると。そして、坂本家はどうも龍馬の時代は水通町に突き抜けていたみたいで、裏口が水通町になるわけです。水通町も1丁目から5丁目までそこへ書きました。これ、読みにくいのでちょうど水通町3丁目のところだけを拡大してみました。そうすると、ここに丸をつけましたけれども、鍛冶半右衛門という、それから鍛冶作助ですか、それから鍛冶久兵衛、それから鍛冶九右衛門、鍛冶荘八、鍛冶宇八という6人の鍛冶屋さんがありますね。これ、鍛冶屋が全部刀鍛冶かというところではなくて、今でも高知は刃物が名物というか、お城の近くに刃物屋さんがずらっとあって、包丁とか鋏とか売っておりますけれども、いわゆる、ああいう鋏とか農作業に使うもの、それを野鍛冶と申します。それで、刀をつくるのは刀鍛冶で、刀しか作りません。ですから、鍛冶と書いてあっても刀鍛冶か野鍛冶かはわかりません。それで、北奉公人町から本町、それで水通町、通町、南奉公人町と5筋ありますけど、その全部の町人の名前が出ているわけです。それで、これは町人の名附牒ですから、武士は名前が抜いてある。だから、坂本家はその空白のところなんですね。いろいろと土佐史談会の方が調べてくれたら、久村屋と相良屋の間だということがわかりました。

それで、『上町分町家名附牒』には鍛冶が25人、それから研師が4人、鞆師が3人、漆屋が4人、白銀師が1人、鏝師が1人と、これだけの職人がいるということでございますので、龍馬は育ったときから裏口を出ていくと、こういう職人さんたちが軒を連ねて仕事をしているわけですね。あの水通町は今でも川が流れていますけれども、片側は自動車が通れるようになっているぐらい幅広くしてあります。もっと狭かったんですね。北側のほうは自動車が通れない細い道ですけども、ちょうど通りの真ん中を水道が流れていたと。これは飲水ですから、役人が立っていて汚さないように番兵をしていたということらしいんですけども、この水通町の両側に職人さんたちが並んでいた。そこで、刀をつくっていたり、鞆師さんが鞆をつくっていたり、漆屋さんが鞆に漆を塗ったりしているわけですね。そういう職人街の中で遊んでいたということですから、自然に職人さんたちの技術を見ているわけですね。そういう中で育ったということなんです。ここは重要だと思っただけですね。お城の周りは上士^{じょうし}だけで職人が住んでいない、侍ばかりなんですね。ところが、上町、下町はいわゆる職人街であるし、それからお医者さんがいたり、それからあと郷土のほかにもいろいろな下っ端で働くような人もいたり、いろいろですね。それから何か占い師みたいな人ですかね、がいたり、瓦屋さんがいたり、畳屋さんがいたり、大工さんがいたりという感じで、これを見ていると、ああ、本屋さんもあるとか、それに馬方なんて書いてありますね。馬方、兼助とかいうのがあって、いろんな人がごちゃごちゃと住んでいた。

そういう中で育ったので、龍馬はまず人を見下すという目線がないですね。これはずっと一生そうだったと思うんですけど、位が低かろうと高かろうと、同じ目線で話をしていると。だから、上の人に対してもへいこらすようなところは龍馬はないんですね。だから、大名

と会っても見事に話をすることができた人だと思えます。それから、根っからに平等主義で育っているんですね。そういう中で、今度は刀関係の職人さんが刀を研いだり、刀をつくったりしているのを見ているので、基本的にきょうは刀鍛冶はでき上がって、中込にやすりをかけているとか銘を切っているとかというのを見ているわけですよ。だから、銘をどうやって切るのかというのがわかっていると。全部ができ上がったところで中込にやすりをかけて、それでそこに自分の名前を彫り込んでいくと。そのときは何か松やにみたいな粘っこいもので張りつけるんですね。大きな丸太を輪に切ったものがある、台、そこへぺたっと張りつけて、上から鑿で、金づちでたたいて、吉行なら吉行と、こう切っていくわけですよ。すごく緊張するんですね、自分がサインを入れるという切りですから。そういうのは、こうやって切れるのかというのがわかるわけですね。ですから、龍馬は自然に刀の基本的なことを身につけていったんだろうと思います。これはどこの藩に行っても、お城の周りに侍がいるのは確かなんですけど、町人の名前がずらっと並んでいるというのは、僕は初めて見たと。大体、町家と書いてあって、灰色にして、ただ町家と書いてあるだけなんですよ。ところが、この名附牒には全部の名前が入っているというので、これは非常に珍しいものだと思います。それで、龍馬はこういう中でいろんな基本的なものを身につけていったと。

その中の基本的なことではですね、刀をまず2つに分けることができるんですね。^{にえ}沸という、ここは刃文があるとしますね。ここの刃の筋のところ、こう光るつぶつぶのようなものが出るんですね。これを沸というんですね。^{にえい}匂というのは1つの雲のように膜になっているんです。つぶつぶは見えないんです。でも、つぶつぶで見えるというのは焼き入れの温度が高いと化学反応して、ここがつぶつぶになるんですね、砂をまいたみたいな。それを沸と。匂というのは、一面同じように雲のように、ずーっとこういうふうになったものは匂というんですね。沸に匂、刀はどっちかに分けられます、匂出来の刀か沸出来の刀か。

それは五箇伝といって、大和、山城、備前、それから美濃、相州鎌倉、この5カ所を五箇伝というんですけども、刀の特に生産の多かったところ。一番温度が高く焼き入れするのが相州鎌倉、正宗がいるところですね。鎌倉時代に鎌倉幕府ができて、京都から刀鍛冶たちを鎌倉へ移動するんですね。そこで、折れず、曲がらず、よく切れる刀をつくれという命令で、新しい技術でつくっていくということで、温度も非常に高くして焼きを入れるというので沸が出るんです。それがきらきら光ってきれいに見えるんですね。ですから、こうやって電気の光で透かしてみると、きらきらぎらと光って見えるというのが沸でございます。どっちかだということですね。

それから、刀の肌というのは鉄のとんてんかんをやって練りますから、いろんな形でこういう模様が出てくるんですね。板目とか柂目とか、それから梨子地肌とかそういう肌が出てくると。

それから、切っ先のところ、ここを^{ぼうし}銚子というんですけども、この線が横手というんですけどね、ここは三ツ角というんですけども、ここの形もいろんな種類があって、ここは

ものを切るために非常に大事なところなんです、そこをどうつくるかということが刀鍛冶のまた技術なんですけれど、その銚子をどうするかということですね。そういうものがある。

それからあと、先ほど申し上げましたように、中込、中に込めるというところでございます、ここはまた重要で後でちょっとまた説明しますけれども。それから、中込というところは絶対に研がないところなんです。中込の銘を切っている部分は研がない。ですから、鎌倉時代につくった刀だと鎌倉時代からのさびがついているわけです。例えば、今からいうと新々刀、龍馬の時代ものというのは、まださびがついていない、光っているものもあります。ですから、各時代、300年なら300年のさび、500年なら500年のさび、150年だったら150年のさびがついていると。このさびというのを見るということ、これがまた重要なんです。そういうふうにして、さびの色を見るということも1つの勉強の方法ということになります。

それで、4枚目をおあげください。ここに2本の中込、銘ですね、銘を拓本のようにとったもの、これを押形といいます。石華墨という特殊な墨がありましてね、本物の刀のところへ張りつけるんですね。それで石華墨というのでとって行って、文字がきれいに出てくるように、浮かび上がらせるようにする。たたくんじゃなくてこするというんですかね。かたい墨なんですけど、刀の拓本をとるように特別につくられたもので、それ以外使わないんですけど、この石華墨でとったもので、それで今回は5本並んでいます。そのうちの1本が左側のもの、「於土佐本国筑前左行秀」「嘉永元年申秋應阪本直方需造焉」ということございまして、直方は権平兄さんのことですので、権平兄さんの注文で土佐において「於土佐本国」、土佐の本国で筑前の左行秀がつくったと、こういうふうに銘が切っています。ですから、拓本ですからこれは実物大でございます。

これだけで全く同じですから、上へ行って、今度はずっとよく見てください。それで、この刀はですね、左行秀をたくさん見ていると非常に特殊です。まず私も拓本だけで押形だけを見ていたんですけども、きのう、ちょっと実物を見せていただきました。ちょっと閉館した後で、ガラス越しでなくて実物を細かく見させていただきました。この刀が特殊だというのは何かというと、中込の形なんです、途中から細くなる。この説明のところに刃長2尺6寸9分というふうに、反り7分6厘というふうにして書いてあって、2行目に「小沸よくついて、匂口冴える、帽子小丸、中心生ぶ、珍しく雉股づくり」と入っています。雉股づくりというのは、鳥のキジがいますよね。そのキジのももと似た形だという。普通だと、ここに鑄筋がこう入ってきて、こういうふうにつくるんですけども、ここからですね、ちょうどキジのももみたいに、ここをこういうふうにつくってあるんですよ。それが鳥のキジのもものこのところに似ているというので雉股づくりというんですけども、なぜこういう刀、僕は左行秀をかなり見ているんですけども、雉股づくりの中込はこれ1本ですね。ほかに見たことないです。

何でこういうつくり方をしたかということですね、実は衛府の太刀という太刀があるんで

すね。今、宮内庁でいろんなセレモニーをやって、その中で太刀をつっている宮内庁職員がいますけど、あの人たちの中に衛府の太刀を差している人がいました。ここからぷすっと線を入れるんですよ。このところで、ここへサメ革を巻くんですね、白いサメ、ほんとうはエイなんですけれども。そのときに、このところに衛府の太刀だと俵がねって俵の格好をした金物がつくんです。割れないように、こういう飾りがついています。ここへ刀が入っているんですよ。そうすると、ここから俵がねを打ち込んでありますから、ここから細くしないと入らないんですね、昔の太刀。ですから、昔の左行秀のご先祖のほうの鎌倉とか南北朝の時代の太刀を想定してつくったものですよ。ですから、写したと思うんです。これ、刀銘「於土佐本国筑前左行秀」と切ってありますけど、実際はこれ、太刀ですから、刀じゃなくて太刀だと思うんです。なぜだというと、刀には裏と表があるんです。体につけたときに、そちらから見えるようなところが表なんですよ。ですから、太刀というのはつるんですよ、金具で。ですから、こういう形で反っているわけですよ。そうすると、この中込を見ると「土佐本国」というふうに切ったほうが表なんですよ。体につくほうが「阪本直方」と切ったほうで裏になるわけですよ。ですから、太刀表と太刀裏、刀表と刀裏は逆になる。だから、これは太刀としてつくっているから左行秀という刀鍛冶の名前は前へ行きますので、ですから、これは本当は刀じゃなくて太刀なんですよ。それで、左行秀が太刀としてつくったと。坂本直方の求めに応じて嘉永元年につくったんだというふうに切ってあります。

ですから、この後、次のページに出てきますけれども、左行秀というのは龍馬の時代の人なんですけれども、水通町に住んでいたということで、土佐藩工になります。そして、水通町から今度は移って行って、大島山のほうに移って刀鍛冶の鍛錬所をつくります。五台山を大島山と叫んだんですよ、そこにつくります。

5 ページ目をおあげください。鎌倉時代、南北朝にかけて左グループというんですかね、左文字、左一門という、その中で一番有名なのが左文字って左というふうに切る。「左文字三拾九代孫筑州住左行秀」「嘉永二年二月吉日於土佐国造之」というふうに名前がございます。ですから、これは太刀というふうに切って、銘「左文字三拾九代孫」というふうに切っているというふうになっていますから、これは太刀でいいんです。それを上へ向けるようにして差したときに表へ来ますから、表に「左文字三拾九代」と切ってあって、裏に「土佐本国」とこう切っているわけですから、これは太刀上ですから、これでいいということだと思います。龍馬の時代に権平さんが会いに行くと、1本つくってくれということで作らせた刀であるということで、この人は土佐藩工になって、何で土佐藩工になりたがるかという、まず土佐藩が抱えた名工であるという 1つのブランドになるわけですし、左行秀としたらやはり土佐 24 万石というのは大変なブランドでございますので、その藩工であるということですよ。

これは土佐藩っておもしろいんですけども、藩工がなくなると次の藩工を決めるときに試験をするんですよ。名工か名工でないかで名工のほうを土佐藩工にすると。左行秀の

ときは南海太郎朝尊ともたかという刀鍛冶が、これは土佐の人なんですけど、左行秀と 2 人で試験を受けて、結局、左行秀が土佐藩工になるんです。

そこに刀を見ている写真がございませけれども、この写真が、ここをよく見るとちょんまげが細く頭の上に乗っているんですけれども、これが若いときの左行秀で、立ってはかまをはいているのは、かなり晩年のほうですね。

これは左行秀小伝という『刀剣と歴史』という雑誌に、季刊誌に載った川口陟さんの文章なんですけど、「故秋山久作は若いころしばしば行秀に面接があったので、現に翁は行秀のガラス写しの写真を撮られたと。それによると行秀は肩幅が広くがっちりした体格であると。その頭はちょんまげではかまをはいて刀を帯びていると」、この写真でございませ。こう見ているというものでございまして、この秋山久作というのは、明治時代になってつばのコレクターで有名になる人なんですけれども、この人は山内容堂の小姓なんです。それで、小御所会議のとき山内容堂が酔っ払った勢いで、ここに 15 代将軍慶喜がいないのはおかしいつって、酔った勢いで岩倉具視と大げんかをやるという。有名な小御所会議のときにそばにいて、そのことを秋山久作翁は明治になってから書いていますけれども、その方の文章でございまして、それでかつて内田疎天君は、どこか行秀は大酒家であったように書いています。多分、土佐人だから酒が強いのだろうという、疎天君の想像であったろうと。行秀にとってはとんだ冤罪だと。左行秀は酒が飲めなかったんです。土佐へ来ると皆さん、酒をよく飲むということで飲めない。私はこの人、水通町にいて刀をつくっているときに、多分甘いものが好きだったんじゃないかなと思って、それでまんじゅうを食べるといのでまんじゅう屋長次郎がそばにいたということで、子供のころから近藤長次郎と親しかったということで、水通町に住んでいて、それから五台山の下へ移って、それから今度は土佐藩の命で江戸の下屋敷で鉄砲をつくれという命令が出るんです。それで、宿へ行くんですけど、そのときに近藤長次郎も後から追っかけて行って世話になると。すごくかわいがった人なんです。近藤長次郎と左行秀の接点って何かといたら、酒が飲めなかったということで、多分まんじゅうが好きだったんじゃないかと。近くにまんじゅう屋があるからまんじゅうをしょっちゅう運んでいて、それで親しくなると、この子は賢い子だなと思っていて、江戸へ出てきたらうちへおいでということで飛び込んでいくというんです。

この人は刀鍛冶ですから、火縄銃なんかも簡単につくれるので、西洋の銃のコピーをつくったりして、土佐藩が何十丁という注文で鉄砲をつくったりもしているんです。土佐藩に抱えられるとき、刀鍛冶兼鉄砲鍛冶として召し抱えるというふうに書かれているそうですから鉄砲もつくったということで、この人と水通町にいるときに近藤長次郎が親しくなったというのがあって、そして龍馬が今度は江戸へ脱藩してきて、多分、近藤長次郎とも会話し、左行秀とも会ってるんだらうと私は思います。左行秀の行動をずっと見ていくと、龍馬との接点が幾つかございまして、これはそうだなというところがこの点からもわかります。

その次に、6 枚目にあてたのが、これが高知の何課だったかな、職員の方がこういうのがあるよといって見せてくれたんですけれども、左行秀の住んでいた家ですね、北奉公人町に

あった。今は第四小学校のプールのあったところなんですけど、そこにいたんですけれども、プールをつくるので、この屋敷を壊しちゃったんですよね。壊す前にきれいに写真に撮っておいてくれたので、残っている。もし、今残っていれば観光地としてきちっとすばらしい建物だなと思っています。これは一応こんな屋敷に住んでいたと。多分、龍馬が最後に帰ってきたとき、左行秀ももう高知に帰ってきていますので、坂本家と北奉公人町の左行秀の屋敷は歩いて2～3分というところですから、多分、龍馬もここへ最後に帰ってきたとき、ここへちょっと顔を見せたりして上がり込んだ家じゃないかなと私は思っていますので、一応、じゃないかなというぐらいで、はっきりしたことは言えないですけど、そういう昔の侍の屋敷というのはこういうもんだということが分かるようにお話し申しました。

そして、最後になりますけれども、7番目に吉行と吉国の兄弟、この人たちは福島県の相馬の生まれなんですよね。それで、お父さんと3人で大阪へ出てきて大和守吉道の門人になると。そして、技術を身につけたところで土佐藩のお抱え工になるということなんですけれども、吉行はただの吉行で陸奥守は切っていない吉行ですね。お兄さんのほうは上野守吉国と受領して守がついているんですね。受領という制度は、例えば正宗とか村正の時代には何とかの守村正とか何とかの守というのはつけません、つけなくていいんですね。これは江戸時代になって箔をつけるためのもので、はやったんですね。これは何とかの守で終わって、その領地をもらうわけではありませんので、ただの名称で上野守吉国というふうに一応受領します。

この受領制度というのがあって、これはまず宮中からもらうんです。何とかの守というのをもらいたいという申請をする、そのときに莫大なお金がかかるんですね。公家さんが間に入ってお金をもらおうと、まあアルバイトなんです、公家さんの。それで、そこで働いているいろんな公家さんの上の人とか、それから間にいる女官とかそういう人たちにも、例えば短刀を1本ずつ全員に渡すとかそういうしきたりというのがあって、それで受領します。そうすると、ただの吉行よりも陸奥守吉行といったほうが箔があるということで、切るようになると思うんですね。ですから、お兄さんの上野守も、それから吉行の陸奥守も同じときに多分もらったんだろうというふうに思っています。ただ、いつももらったかというのは、記録でわからないんですけど、そのうち資料が出てくればわかると思うんです。

土方歳三が会津兼定という刀、和泉守兼定というのを使っています。そのときに、いつももらったのかという年号を調べるということをやったことがあるんです。そのときにどのぐらいのお金を使っているかというのもわかったんです。女官の人たちがいろいろと動くんですね。その女官一人一人に短刀を1本ずつと、たしか5両ずつぐらい包むとかいうしきたりがあって、それを全部やるというようなことですので、バックに大名がいなくなかなか受領できないんですね。ですから、土方歳三のときは新撰組で後ろに会津藩がいたので、会津藩の力で宮中に圧力をかけてお金をばらまいて、それを受領していると思うんです。

吉行、吉国の時代はもっと前の方ですから、江戸時代の初期のほうに土佐藩がバックにいて、この2人に受領して守号をつけさせたんだろうと思います。結局、世の中平和なんで、

刀がたくさん売れるようにということで、偉そうな何とかの守というようなブランドになるわけですよね。大岡越前守つっても越前の国の領主じゃないわけですよね。ただ、そういう位というんですかね、そういう箔をつけるということで、刀鍛冶もただの職人で刀をつくるんだけど、いわゆる箔をつけるために上野守吉国といったほうが立派そうに見えると。ですから、吉行も2本あって、龍馬がお兄さんからもらったのは、まだ受領していない前の吉行で、その後に陸奥守をもらって、もらってからは全部、陸奥守というふうに切るようになります。ですから、ただできがよかったんでしょう。龍馬が栗田口忠綱ぐらいあって見えると言われるというのは、こういう刃文だったからです。兄弟ですから、よく見ると、例えば吉という字だって似てるんですよね。ただ、よく見るとやすりの角度が兄弟で違います。それから、刃文も同じような互の目乱れなんですけれども、お兄さんのほうが沸が深いというんですかね、きらきら光るものが多いと。この刀に限って言えば、吉行のほうが地味だというような刃文になっています。

この辺がこの違いで、1本1本の刀というのは焼き物と同じで、何色が出るかわからなくて焼いてみて、その温度によってそのときに赤いきれいな色が出るか出ないかと、柿右衛門なんかは苦労したみたいですけども、焼き物の陶工と刀鍛冶の刀工というのは技術的に非常に似ているんですね。温度は大体1,000度近くまで上げるとかね、800度にするとかというようなことで。それで、でき上がってみないとどんな刃文が出るかはわかんないんですよ。そのときの温度によって微妙に違ってくるということがございます。ですから、多分、吉行を龍馬がもらったときには、互の目乱れでほんとうに栗田口忠綱みたいな刃文に見えたから、非常にできのいい吉行だったんだろうと思います。それで、もううれしくてあちこちで見せ歩いてたんだろうというふうに私は思っております。

それと、あと5本並んでいますので、その5本について、ちょっと龍馬の関係したものがあるので、きのう、見せていただいたので展示の5振、1番が吉行、これは京博で焼け身で北海道で火事に遭っているやつですね、小樽の火事のときですから。ですから、刃文が直刃になっていますね、乱れていないんですね。あれは結局、つけ焼き刃というもので、研ぎ師が刃文がないがために、刃文を描くことができます、研ぎで。それをつけ焼き刃といいます。今でも、現代語でもつけ焼き刃って、あの人の知識はつけ焼き刃だって、あるように見えて本当はないんだという、そういうふうに使います。そういうように、現代語として刀の用語というのは、大体鞘を当てる、あいつと俺は鞘を当てる、けんかだと。鞘をこんど当てて、けんかをやるというのとか、それから反りが合わないとかね、いろんなことを現代語として使いますが、それが60ぐらいありましてね、数えてみたら、普通に使っています。だから、しのぎを削るなんていうのはすごく有名な言葉で、今でも使っているということですね。京博から来ている焼け身のものとは結局、重要文化財に指定の中で焼けているからということで、指定から外れています。

それから、権平さんの注文打ちの左行秀、これは僕は左行秀の中でも左行秀が自分の祖先、左文字を、いわゆる古刀を模倣して、コピーしてつくったものだろう。だから、雉股中心に

したり、直刃にしていますね。さかのぼるとどうしても大和伝になるんですね。古い時代の左文字は大和伝ですから、それで正宗の弟子になった左文字が、今度は相州伝で沸が強いになりますから刃文が変わりますけれども、この権平兄さんのものは太刀であるし、雉股中心にしているということで、これは古刀の左文字をコピーするというんですかね、それに似たようにつくったものだと思います。

それから、勝光宗光合作という、これはなかなかいい脇差でした。永正2年の裏年記があるので、重ねも厚いし、しっかりしていて重いし、太刀の脇に差すということですからね、使ったら非常に使いいいだろうと思いました。

それから、埋忠明寿の銘がある、彫刻があって、梅が彫ってありますよね。龍馬の変名は梅太郎ですので、自分の梅を彫っていることですのでごくいいなと思って、銘は良くないです、これ、偽物ですね。龍馬はそれを分かっているんだと、分かっているながらも、やっぱり彫りがいいからとっておこうということだったんだろうと思います。

それからもう1つ、5本目が相州住圀秀、これは嘉永7年8月の裏年記がございました。2尺6寸6分ということで、ちょうど龍馬が江戸に行っているときにつくった刀でございますので、これは龍馬は為替でお金を父親からもらっているんで、あまり無駄遣いするなよと言われていながらも、この圀秀を買ったんだろうと思いますね。ちょうどそのときの年号ですから多分、それで弘瀬健太にあげたというような、いわれ書きがついておりますけれども、これも龍馬好みでいいものだなと思いました。

ですから、左行秀にしろ、それから勝光宗光の合作にしろ、この相州圀秀にしろ、みんないいもので、やはり龍馬は目ききだなと思います。一遍に5振を見られるというのは今回が初めてだそうですので、十分に見てくださいませ。

それから、あと龍馬が俺が死んだら、お龍を三吉慎蔵に預けるから、三吉慎蔵って真面目な人だからいろいろと世話をしてくれるだろうと。だから、俺が死んだら、この刀を三吉慎蔵に渡してくれという遺言があったみたいです。ですから、正宗の刀を三吉慎蔵に渡しています。これは三吉慎蔵日記に書いてありますから、そうだと思います。龍馬が何本持っていたかはわかりませんが、かなり数があったんだろうと。

その中で一番いいものが正宗、やはり何といても刀剣史の中でさん然と輝くのは相州正宗でございます、国宝にも何本もなっています。ただ、大すり上げといって長かったものを短くしていますので、無銘で「伝正宗」と、伝えるところによると正宗であるというのが大名家にはたくさんあるんですね。川路聖謨という勘定奉行がいて、嘉永6年にペリーが浦賀に入って手紙を渡して帰っちゃったあと。その後にロシアのプチャーチンというのが長崎に入って交渉をやるということで、川路聖謨が江戸から長崎に向かいます。そのときに道中、街道筋にある大名家がみんなお蔵にしまってあった刀をですね、川路聖謨に見せるように街道筋の旅館に並べたというんですね。川路聖謨というのは大変目ききだったということでございまして、それを知っていて、なにしろ幕府の勘定奉行の川路聖謨が長崎に行くぞというので、各大名が競って名刀を並べたんだそうです。それで、川路がこれを見て、

これはいいな、これはいいなとか言いながら、それで見ているときはつかを抜かないで見ますので、これは正宗だなどと当てていくと。正解率が非常に高かったんだそうです。それぐらい目ききだったということでございます。

龍馬も自分の持っている刀の中で一番いい正宗、これ、多分ね、龍馬が買ったんじゃないんだと思います。龍馬が目ききだということであるんで、大名の誰かから 1 本いただいたんだろうと思います。拝領刀だと思います。それで、一番大事にしていたものを、お龍を何とか面倒みて下さいということで、届けろというふうになっていたんで、届けたようでございますので、その刀は今三吉家にはないみたいですけども、正宗で名刀だったんだろうと。龍馬が最後にこれをとったようで、多分、龍馬みたいな目ききが一番いいものを残しておいたんだろうと私は思っております。

ずらっと、こう話してきましたけれども、刀に関してのものというのは大変奥行きが深うございます。そして、それはまず歴史を知ること、それから数をたくさん見ること、龍馬は才谷屋が質屋をやって上級武士にお金を貸して、そのかたに刀を預かっていたそうですから、たくさん名刀があったんだと思いますね、蔵の中に。それを見るということが多分できて、名刀も見ているんだろうと思います。で、職人さんたちの仕事を見ているということで、龍馬は知識を相当身につけていたと。そして、こういう本も読んで、龍馬が目ききだということは知れ渡っていたと。だから、龍馬に近い大名、長州かな、薩摩かな、なんて思いながら考えているんですけど、そういうところだったら、みんなお蔵に何百本という刀が入っていますから、手柄があった侍には刀を渡すということになっていますので、龍馬は一振、正宗をどこかからいただいたんだろうと思いますね。大事に大事にしていたと、そういうことだったんだろうと私は思っております。

ざっと 90 分、話をしてきましたけれども、一応概略を説明したということで終わると思いますけれども、質問の時間というのを設けてくださいというふうに三浦さんから言われておりますので、時間は短くなりますけれども、きょう、私がお話しした中で、龍馬と刀の中でいろんなことで質問をくださっていると、誰が殺したんですか、龍馬を切ったんですかという質問がいっぱい出るんです。それはあちこちで聞いているんで、私はわかりませんっていうんです。きょう、話した中で何か質問がある方は挙手を願います。できるだけ答えるようにいたしますので、よろしいでしょうか。

質問者：すみません、質問なんですけども、よろしいでしょうか。

小美濃：はい。

質問者：さっき、吉行の名前を、陸奥守を上につけると、吉行の名前より陸奥守のほうが後になるということですか。

小美濃：受領する前は吉行だけだったんですよね。それで、今度、陸奥守吉行になりますよね。そして、新しくつくった刀は後から銘を入れるということはないと思うんですよね。銘の位置が上になっちゃいますから、目くぎ穴のちょっと上あたりから切るというのがセオリ

一になっていますから、二文字で切っているのに、今度は三文字足すとすると、うんと上のほうに切らなきゃならなくなりますので、受領した後でつくった刀が全部、陸奥守を入れていると思います。

質問者1:小美濃先生がこちらの龍馬記念館に龍馬の刀とまた別の陸奥守吉行を寄贈されていらっしゃいますけど、あれは龍馬佩刀の吉行より後のほう。

小美濃:そうですね、多分。龍馬の拝領したものは二字銘の吉行ですから、若いときにつくった刀。で、陸奥守を切っているものはもうちょっと後になって、中年になってから受領したものだと思います。

質問者:今までここに寄贈されている陸奥守吉行は、龍馬の刀より先のものやと私が認識していたんですけど、やっぱり後の？

小美濃:後のものですね。

質問者:はい、わかりました。ありがとうございます。

司会:ほかにどなたかいらっしゃいますか。

小美濃:なければ、これで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会:小美濃さん、その本を見たい方は？

小美濃:そうですね、この本を見たい方は前へ来て、手にとってごらんください。

司会:私も昨日、見せていただきましたけど、申の巻の中に勝光宗光の合作のものも出ておりました。

小美濃:そうですね、合作がありましたね。

司会:今回のものではないんですけど、同じような特徴があらわれたものが出ていましたので。

小美濃:合作は多いんですよ。

—— 了 ——

—— 付記 ——

吉行と受領制度について詳しく話をする時間がありませんでしたので、「土佐史談会」の機関誌『土佐史談』に論文を発表しますので、ご期待ください。